慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新疆における盛世才の統治と粛清:一九三七年~三八年
Sub Title	Rule and purge by Sheng Shicai in Xinjiang : 1937-38
Author	木下, 恵二(Kinoshita, Keiji)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科
Publication	2011
year	
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu :
	Journal of law and political studies). Vol.89, (2011. 6) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koaraid=AN10086101-00000089-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新疆における盛世才の統治と粛清 ——九三七年~三八年——

木

下

恵

問題の所在

二 盛世才による大規模粛清 クーデタへの危機感

スターリンへの忠誠

三 抗日体制下の南疆 盛世才と抗日

抑圧体制と抗日宣伝 ソ連勢力の後退と民衆生活の混乱

1

間 題 の所

を促す条件は、 ントに過ぎず、 二〇世紀前半の新疆においては、 経済、 他の被支配諸民族とは言語、 教育、 交通などの諸側面でいずれも未発達であった。 少 数派の支配民族たる漢民族が統治権力を維持し続けた。 文化、 宗教、 風貌すべてにおいて完全に異なっていた。 漢族は全人口 国民国家形成 0)

新 ながらも、 重要な焦点であり、 配 代化と領土の保全を実現していくためには、支配民族と被支配諸民族との間の文化的断絶を架橋し、支配民族と非支 を認め、 あ 治 下に新疆を統治した。そして植民地主義と戦争の時代の中で、歴代の漢族地域権力は新疆の近代化と領土の保全を統 家 疆が Ď 中 諸民族という区分自体を実質のないものにすることは不可欠な道であった。 の の様相を呈していた。 重要な課題として抱えていた。 -央政府は新疆を統治する実質的な力を有しておらず、 九三三年に新疆の最高権力者となった盛世才は、当初ソ連の影響を受けて民族平等政策を実施し、各民族の存在 この両者 中 それぞれの文化を発展させるという方法を通じて、 国 の一部であるという自身の想定に基づき、また新疆自体の近代化を目標として統治をおこなったので の関係がどのように作用してきたかを見ることは新疆の 民族語による教育をおこなう学校建設運動と、 ン形成のための一 漢族地域権力は中央政府の統制からは自由であったが、「中国」というアイデンティ 新疆の統治者はそれぞれに、中央政府の支配下にあるということとは別の意味で 歩であった。 新疆は名目上中国の主権下にありながら、 新疆における中国ネイションの形成を図ろうとした。 行政への非漢族の参加は、 「中国」への統合を考える上で重要である。 それゆえ言語と教育、 不十分な点を多々残し 政治 実際には 、の参加 独立 テ 1 国 は 近 0)

L

か

ネイショ

盛世才政権の民族政策は一九三七年には実質的に破綻してしまった。

破綻をもたらした要因はひとつには

南

疆

のウ

Ź

グル社会にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしようとするものである。

その結果構築されていった政治体制は国家建設、

ネイション形成という点で新疆の住民、

てた要因は何なの

か、

集権化を当地民族の自治的状況よりも優先したために、 でネイショ 大規模粛清であった。 き起こしてしまったことにあるが、 ン形成は頓挫することになった。 これによって、 決定的な要因は三七年後半から三八年前半にかけて盛世才によっておこなわ 名目上は民族平等政策の看板は掲げ続けられたもの 南疆 の有力者であったマフムード Ó の逃亡と南疆での反乱 実質的には 抑 圧体 を引 制 れ 下

アが 世才の社会主義信奉を彼の転向までは「偽装」ではなかったとする研究が生まれて るソヴ 世才との あるというものであった。 自身の権力維持であり、 粛清された人々の没収財産の一部を横領するなど、 験が特に歴史的 盛世才は当時から現在に至るまで非常に道徳的および政治的批判を受けやすい人物である。 行稿は、 「カメレ 1 エ 共著の中で、 そのような研究潮流を踏まえながら、 トのモデルにしようとしたと論じた。 ・オン軍閥」と称したようにソ連、 評価の低さにつながっている。 主に盛世才の回想録に依拠しながら、 ソ連への依存や中国共産党との提携は 最初にそれと異なる盛世才像を描いたのはアレン・S・ホワィティ 中国共産党、 民族政策の実質的な破綻を決定づけた大規模粛清に盛世 一九九〇年代以降、 盛世才に対する中国大陸の 人間的に非難される面は確かに存在するが、 盛の社会主義信奉が本気であり、 中国国民党とそれぞれ手を結び、 「偽装進歩」であり、その本質は反動的な 新しい史料の発掘とともに、 研究の伝統的評価は、 一方的に関係を絶 彼は新疆を中 政治的手法 ングであっ それ以上にラテ 中 彼の行動 国 に お た。 軍 の 残酷 の基 Ų١ 玉 ても 彼 閥 り立 ごさや お は つ け は で た モ

3

一 盛世才による大規模粛清

() クーデタへの危機感

を挙げて説明している。 キストの摘発を進めようとしたこと、マフムード・馬虎山の反乱が少数民族系の指導者を打倒する口実になったこと た。これによって逮捕された人数はおよそ二八〇〇名とされる。なぜこのような粛清がこの時期におこなわれたのか。 で「清党運動」 『新疆簡史』は、抗日戦争の勃発によって国民政府が新疆に注意を向ける余裕がなくなったこと、 この粛清の対象は民族を問わず、思想傾向を問わず、官僚、教員、富裕商人、コミンテルン人員など多岐にわたっ 九三七年八月から三八年前半にかけて、ウルムチを中心とした新疆各地で盛世才による大規模な粛清が展開され が展開され、盛世才がその運動の拡大を利用したこと、すなわちスターリンが中国においてもト 一九三六年にソ連 口

こではより具体的にこの粛清をもたらした諸要因を検討し、 うに国民政府が新疆に注意を向ける余裕がなくなったことが、盛世才の行動に影響を与えたとは考えられ 疆は国民政府の意向を気にする必要がなくなっており、盛世才自身にその気もなかったため、 策」に強い不満をもっており、蒋介石や国民政府の打倒さえも望んでいた。このように日中全面戦争開始以前から新 のを最後に、 な粛清が実行されたのかという点にある。国民政府は一九三五年七月に駐ソ大使館付武官の鄧文儀を新疆に派遣 でのスターリンによる粛清が盛世才に影響を与えたとして、それは「利用」という側面しかもたないのだろうか。 粛清の主要な動機が、 新疆に対して直接的な影響力を行使することができなくなっていた。盛世才は国民政府の「不抵抗政 盛世才の権力の維持、 強化であることは間違いない。 盛世才がどのような動機に基づいて新疆統治をおこなっ 問題はなぜこの時期にこれ 『新疆簡史』 ほど大規模 が言うよ

7 たのかを検討したい。

代は、 捕されていった。 疑われた) な犠牲者は教育廳長の張馨であった。 デタによっておこなわれてきた。 世才自身が自身の権力掌握のためにおこなった陶明樾、 初に挙げておかなければならない 楊増新を殺害した「七七クーデタ」(一九二八年)、金樹仁を追い落とした「四一二クーデタ」(一九三三年)、 人物であり、 盛世才との間に矛盾があった。(3) 盛世才が次のクーデタの発生を恐れるのは当然であろう。今回の粛清の最初の主 彼は「七七クーデタ」と「四一二クーデタ」双方に関与した のは、 盛世才のクー 彼の逮捕を皮切りに、省政府、督弁公署の主要幹部が続 陳中、 デタへの危機感である。 李笑天殺害のクーデタ(一九三三年)など、全てク 民国期以降、 新疆に (あるいは関与を お ける政権交 々逮 盛 葽

て鎮圧された。 起軍は一時カシュ のインド逃亡事件が起こり、 また、 粛清開始前の一九三七年四月には、 盛世才の粛清はこの蜂起の最終局面で開始されたのである。 ガル新市を除くカシュガル区、 五月三〇日にはマフムードの残存部隊とホータンの馬虎山回族部隊が共に蜂起した。 カシュ ホータン区の主要都市を支配下におき、 ガル区におけるウイグルの最有力軍事指導者であったマフム 九月にソ連軍の介入によっ 蜂 F

彼 盛世才が省政府部内の反盛世才勢力と少数民族が結託したクーデタに危機感を抱いており、 ことが起こっ どうか確証 で張馨とともに逮捕された者に、 動を呼 の 娘の 南疆 びかけるよう求める手紙を書き、 回 はないが、 想によれば、マフムードの残存部隊が挙兵する際に、 での少数民族による蜂起が、盛世才のクーデタへの危機感を増幅したことは想像に難くな た可能性はある。 マフムード自身、 実際には、 モンゴル族の西里克 新疆の主要な非漢族有力者間に連絡があったことを認めており、(音) それが盛世才の手に落ちたために逮捕されたと述べている。 逮捕は西里克が張馨らと省政権転覆を共謀したという名目でおこなわれた。(『) (新疆省教育廳副廳長兼ウルムチ・モンゴル文化促進会会長) 西里克に挙兵への支持と新疆各地のモンゴ これが事 このような 最 ル 初 が 0 が粛清 実 い 致 73

この危機感が大規模な粛

清 Ì の開始に影響を与えていたことがうかがわれる。一九三七年一〇月には民族平等政策の象徴であったホ ズ省副 クーデタへの危機感だけが大規模な粛清を引き起こした要因ではなかったことを物語っている。 主席 が逮捕され、 民族政策の実質的な破綻を印象づけた。 ただし、 粛清がこの範囲でとどまらなかったこ ·

スターリンへの忠誠

学時代の同郷会の友人で、彼が新疆統治のために招いた「十大博士」の多くが中国共産党員や社会主義に関心を持つ 理論をもとに建設されているソヴィエト・ロシアの実際の状況を見たかった」ことであると述べている。(8) ヴ 入しなかった事実を見ても、 人々であったことや、 置づけようとしていたかを確認する必要がある。 ている。 17 ィエト化し、 もう一つの重要な粛清の要因を考えるためには、 彼は回顧録において当時マルクス主義を信奉していたこと、新疆に行った動機のひとつが「マルクス主 中国のソヴィエト地域に加わる」という考えを有しており、 盛世才が一九二七年から二九年まで国民革命軍で参謀などの職を務めていた際にも国民党に加 彼がマルクス主義、 ソ連に強い関心を抱いていたことがうかがえる。 彼はソ連と関係を持ち始めた一九三四年頃にはすでに、 盛世才自身が中国革命とソ連との関係の中で自分をどのように位 ソ連指導部はその考えを誤りであると制 彼の日本留 義

助 t を準備したいと申し出ている。 と考えていたことがわかる。 また一九三六年三月にモスクワにいる王明に届いた盛世才の手紙は、 盛は自分が信頼に足るものであることを訴えながら中国共産党との協力関係を強く求め、 青海、 ソ連 寧夏、 の戦略に関して意見を述べ、新疆を通じての紅軍への援助を申し出ている。(※) 新 疆の五省を中国革命の根拠地とすべきであると提案し、 しかもそれは中国共産党に従属するのではなく、 これらの事実から、 盛世才は国際共産主義運動の中に自分の確固たる地位を築きた 自らを「中国革命の最も強力な指導者」 あわせて紅軍への大規模な装備等 むしろ援助者として中国共産党と対 一〇月の王明 紅軍のためにも陝 宛 の手紙 と位 の 援

ージ

リンに忠誠を示し、 を占めるためには、 あわよくばより優位に立ちたいと考えていたことがうかがえる。そして中国の社会主義勢力において重要な地位 彼に認められることは盛世才にとって最重要課題であった。 何よりも社会主義勢力の最高指導者であるスターリンに認められることが重要であった。 ス

とって非常に重要な存在となった。 才政権と中国共産党との間に抗日民族統 新疆はソ連から中国共産党への援助、 九三七年五月、 コミンテルンの指示の下、 連絡通路となった。十月にはウルムチに八路軍駐新疆弁事処が設立され、(ミヒ) 一戦線が樹立された。こうして実際に盛世才の統治する新疆は中 新疆は壊滅状態にあった紅軍の西路軍の残存兵を受け入れ、 -国共産 その 盛世

うである。そして当初の中国共産党の肯定的な反応に彼は満足していた。 疆 であった。これを盛世才が中国共産党の権威を認め、 憶録を見る限りでは、 が中国共産党に対するソ連からの援助・連絡通路として重要な地位を築いた後の申し出だからである。 盛世才が中国共産党に入党を申し出たのは、 彼はこの入党の申し出によってソ連と中国共産党の自身に対する評価を確認しようとしたとよ 一一月に王明と康生が延安への帰路途上にウルムチへ立ち寄 それに服従しようとしたととらえることはできない。 盛 世才 った は の 新 П

表明したことに非常に満足した。 と会い、 九三八年九月彼は直接モスクワを訪問し、 ところがソ連指導部によってこの申し出が却下されたことにより、盛世才は非常に不安になった。そしてつい 中 国の最高指導者のように扱い、 スターリンと三度にわたる会談を実現した。彼はスターリンが三度も自分 新疆の重要性と新疆の将来についての自分の考えに個人的な関心と承認

に

の党組織活動に対する不満を党代表である鄧発に告げたことを明らかにし、 わ n 以は帰国 た盛世才とソ連駐ウルムチ領事オブディエンコ 新疆で活動している中国共産党員への不信感をあらわにし始めた。 (I.H.Ovdienko) との会談で、 新疆における中国共産党員の中には自分 盛世才は新疆における中国 一九三八年一二月一二日に おこな

を決定し、一九三八年一二月に林彪がウルムチで盛世才にこの決定を伝えた。このようなモスクワを無視した行動も、(②) ターリン自身によって解決されることを希望した。また、中国共産党はコミンテルンの意向を無視して盛世才の入党(%) を信用せず疑惑を持って接するものがいると不平を述べた。またこの問題がモスクワに報告され、 コミンテルンとス

すでにモスクワでスターリンの意向を直接聞いていた盛世才に不信感を強めさせた可能性は高い。 スターリンの自分への信頼に自信を深め、また中国共産党への不信感を募らせた盛世才は、一九三九年七月以降新

疆を国民党とも中国共産党とも異なる「六大政策政治集団」であると主張し始め、「抗戦勝利、 最も光栄ある歴史を有する独立した政治集団となる」として、自らを中国の最も代表的な政治指導者と位置づけて う た²⁹ 新中国建設の際には

三七、三八年の大規模粛清実行の要因ともなったのである。 主義勢力の代表、 このように彼は少なくとも一九四○年までは一貫してスターリンに認められ、 中国革命の代表としての政治的地位を確立しようとしてきた。そしてこのような彼の政治 評価されることを望み、 中 国 盲 1の社会 一標が

清 的に進めているがゆえに、新疆でも同じく展開されるべきものであった。この点において、盛世才の粛清は :を自身の権力保持のために利用する側面をもつとともに、スターリンへの忠誠を示すための積極的な模倣でも スターリンによる自らの評価を気にする盛世才にとって、すでにソ連で展開されていた粛清は、 スター IJ ソ連 ンが積 0) 極 粛

あ

った。

か チに立ち寄った際、 誰がト ウルムチからスターリンとディミトロフに手紙を送っており、その中で新疆に派遣されてきた二五名の中国 ロツキストであるか分からないと、 直接的なトロツキスト摘発の働きかけが王明によってもたらされた。一九三七年一一月に王明らがウ 王明は盛世才にトロツキストとの闘争を提起した。 王明に全員の写真をみせて尋ねたという。 盛世才はコミンテルンから派遣されてきたな 王明は三七年一一月二五 ル

は な打撃を受けたのである。 乗り出し、 の民族平等政策を実質的に指導していた王寿成(兪秀松) ることを伝え、 会見しており、 九二〇年代モスクワ中山大学にいたころから確執があった。王明はモスクワを発つ直前クレ トロ ツキストであったとし、 コミンテルンから派遣されてきた人員は逮捕された。そのなかには盛世才の妹婿として信頼も厚く、 特に強い調子でトロツキストとの闘争の強化を訴えていた。 スターリンは王明に統 特にナニマロフ 戦線戦略の実行とトロツキストに対する闘争が彼に課された重要な任務 (王寿成・兪秀松) も含まれていた。 の名を挙げて訴えている。 これによって新疆の民族平等政策は大き 当然盛世才は ト 王明と王寿成の間 ロツキスト」の逮 ムリンでスターリ 新 捕 に で 疆 あ は

(「十大博士」) など、 いても不思議ではなかった。それまで国民政府寄りの古株の省政府官僚と少数民族が主であった粛清対象は、 コミンテルン人員、 コミンテルンから派遣されてきた二五名全員がトロツキストであったのなら、 ありとあらゆる種類の人々に拡大されていった。 ソ連駐ウルムチ総領事アプレソフ、自身が招いた共産主義者やその傾向のある さらに多くの トロッキス 同郷の 留 学仲 新 気に 疆

n 年二月であった。 政長が空席となり、 出するようになっていった。 力化をもたらした。 73 このような大規模な粛清はただでさえ統治のための人材が乏しい新疆をさらなる人材不足に陥らせ、 公職に就いていた非漢族の有力者が軒並み逮捕され、 より近代的な行政制度を構築しようとする国家建設の試みは打撃を受け、 軍事司令官であった蒋有芬がその職務を兼務した。 例えばカシュガル区では、 一九三七年末に行政長の万献廷がウルムチに呼ば 新たな文官の行政長が就任したの 民族政策の指導者であった王寿成 軍人と警察の 行政 は一九四 n た後、 も排除さ 権力が 0 突 行 無

9

ロツキスト粛

先手を打って「危険な」分子を除去しようとしたからであり、

この時期に大粛清をおこなったのは、

第一に少数民族の反乱に直

面して、

クーデタ

の恐怖

心を募ら

第二に王明らを通じて伝えられたト

盛世才が

あ 強化というスターリンの意を受けて、 った。こうして盛世才は従来の民族平等政策を実質的に破綻させ、 盛がスターリンへの忠誠を示すために かつ行政組織の無力化を招来し、 「積極的な模倣」をおこなったためで ネイショ ン形

三 抗日体制下の南

成と国家建設の両面における試みを頓挫させた。

○ 盛世才と抗日

5 あったのは れるウイグルの主要な居住地域だからである。ここでまず確認しなければならないのは、 的な理由によるが、 ろうか。その点について、 れ 盛世才の粛清に伴う民族政策の実質的な破綻にともなって、 中 -国社会主義勢力の指導者として何をおこなおうとしていたのかである。 「抗日」であった。 なによりもカシュガルを中心とした南疆こそが現在中国の民族問題においてしばしば取り上げら 南疆のウイグルを中心に検討してみたい。 新疆の住民はどのような統治体制の下に置か 分析対象を南疆に限定するのは、 彼の言動をみると常に彼の念頭 盛世才がスターリ 一つには史料 n ンに認め たのだ

彼 反乱に留学先の日本から帰国して加わった。結果的に、 また軍人を志した後に知り合い、 原県盛家屯 の経歴は、 盛世才の日本に対する姿勢が非常に厳しいものであったことは、 の出身であり、 一九三一年満洲事変以後の日本の東北分割占領という事実とともに、 日本留学中に一九一九年ヴェルサイユ講和会議に反対して、 実子のように目をかけてもらい、 郭松齢は日本の干渉によって敗れ、 婚姻により義父となった郭松齢の張作霖に対する その経歴からも明らか 彼の反日姿勢の十分な根拠となっ 帰国運動に積極的 かである。 (35) 命を失った。このような 彼は東 に参加した。 北 奉天省開

13

カシュルの一九

後

さらに盛

世才は単に新疆を抗日戦争の後方基地と考えていただけではなかった。

ている。

会に対し、 る内容であった。 となって帝国主義 盛世才は南京国民政府の 彼は 「七項目救国綱領」を打電した。それは帝国主義勢力に対する「不抵抗政策」 (※) の侵略と戦い、 「不抵抗政策」に対して強い不満を抱いていた。 また「世界の我々を平等に遇する民族」(孫文遺嘱)とともに協力することを訴え 一九三六年七月一 を批判し、 四日に国 民党中央委員 玉 が つ

勢を示し、 政府を転覆することが中国と新疆を救う唯一の道である」と伝えているし、三六年一〇月四日の王明への手 連と協力して日本と対抗するという一貫した構想があった。 からの軍事援助について盛と相談していた。一二月の西安事件発生当初、盛は張学良、(③) 張学良との連携という前提があった。一九三六年八月張学良は栗又文と董彦平の二名を新疆に送り、 Ð 盛世才は権力を握ってまもない一九三四年一月にソ連に中国の西北地区で共産主義を実施し、 陝西、 後にソ連の意向によってその支持を放棄したことが明らかになっている。(雲) 甘粛、 青海、 寧夏、 新疆の五省を中国革命の根拠地に変えるべきである」と伝えている。(※) 盛には西北地域を基盤としてソ 楊虎城を積極的に支持する姿 「蒋介石 共同抗日とソ連 後者の提案には 指導 紙 の中 の 中 っ 央

れもまた盛 を開始した。 九四〇年まで積極的に新疆各地で続けられ、 日本軍の綏遠侵攻のニュースを受け、一九三六年一二月から新疆反帝民衆聯合会 の抗日に対する積極的な姿勢を反映している。 抗日戦争開始後、 募金運動は本格化し、三八年以後には抗日募金活動が日常的な活動として展開された。 戦闘機一○機を購入し国民政府へ送るなどの支援がおこなわれた。 (以下、 反帝会) は抗日募金運

九三八年九月に第三回全疆民衆大会が開催された。 ガル区の地元の指導者五〇〇名が国費でウルムチへ招待されたとイギリス領事は報告している。 おそらくこの大会への出席のことだと思われるが、 盛世才 同 は彼 時

盛がモ

スクワ訪

簡

から帰

玉

た直

才 n を奮い立たせ、 らと会い、 ゆえ、 が 闘の準備を始めることを命じたという。 このような盛世才の政治目標のもと、 思 Ų١ 描 一九四一 「新疆は決定的なそしてそれゆえ激しく血の流れる戦争が戦われる最後の場所である。 Ų١ ていた可能性は高い。 強い抵抗をおこなえる準備をし、 年四月日ソ中立条約、 そしてそこでの勝利は間違いなく彼を中国の最高指導者とするものであった。 六月独ソ戦開始を契機にソ連に対する彼の態度が変わっていったのである。 新疆の統治体制もそれ以前とは姿を変えていった。 新疆における日本との最終決戦をソ連とともに戦うというシナリオを盛 侵略者を確実に撃退しなければならない」と述べ、 次に住民がどのような新 だから我々は 各々が家に帰 自

抑圧体制と抗日宣伝

(二)

たな統治体制下に置かれていったのか、

実際の統治の様相を南疆のカシュガル区を中心に確認してみる。

こうして南疆では中央アジア出身者が権力を握り、 で権力を握った。 た中央アジア出身者が各地 で四千人、一九三八年初めまでにホータンからカシュガルまでの地域で一万八千人が逮捕されたと伝えられている。(空) 反乱協力者摘発活動が活発に展開された。イギリス領事館の情報では、一九三七年九月から一○月の間にカ が に介入した赤軍の中のクルグズ(キルギス) 発活動はカシュ 形成され、 摘発活動は容赦なくおこなわれ、 九三七年九月マフムー ウイグルは徹底的に抑圧される状況に置かれた。 また当局は警察や軍隊への動員対象からウイグルを外し、 ガルでは以前から警察の中心にいたコミンテルン人員カーディル・ハジによって担われた。 の警察の責任者として配置された。(4) F _O 残存部隊と馬虎山軍 行政長自身が不在になるなど軍隊、 部隊はカシュガル区やホータン区に駐留し、 主にクルグズによって構成される軍隊、 の敗北後、 彼らは一九三九年に新疆を離れるまで、 カシュガル区、 まさに盛世才の粛清と同時期に進められたことによ 警察権力を抑制する力は従来の行政機構 主に現地のクルグズに頼るようになった。 ホータン区では軍、 それらとともにやってき 警察を中心とする統治体 警察による反乱者 それぞれ 反乱 ガ 鎮

圧 摘

により設立された多くの会立学校の教育内容にどのような変化が起こったかを確認できる史料はない 教育は強制 スと関係のある人物、 のようにウイグル社会に対する厳格な管理・抑圧がおこなわれた。 ホ 的におこなわれ、 1 タン、 カシュガ インド経由でハジ カリキュラムには毎日一 ル、 アクス地域に一八歳から二八歳の若者を教育するために多くの学校が開校され (巡礼) をおこなった人物の多くが捕らえられ、 時間の軍事教練が含まれていた。 地元住民が主体となってウイグル族文化促進会 以前の有力者や富裕 その財産は没収された。 が、 イギ

ら全く失われていた。

<u>(</u> えられた。 ほぼ る興味深い演説がある。 7 才が日本との なっていた。一九三五年九月一八日にも満洲事変記念日としてカシュガルで集会がおこなわれており、(※) 強い介入がおこなわれたことが推測される。 およそ省票銀二五〇〇万両の募金が二四回にわたってカシュガル区からウルムチに送金されていることが 1 (日本商品) の授業がおこなわれ、 キャンペー このような宣伝を抑圧体制の中に置かれていた住民たちはどのように受け止めていただろうか。 このような抑圧と並行して進められたのが、 :毎日反日宣伝活動がおこなわれた。 一○月三一日にはカシュガルの全ての学童に日本の侵略と暴行の および七月七日 また、 ボイコットキャンペーンが開始され、 新疆における「決定的な戦争」について言及したことを受けて、一一月からカシュガルの ンもこの記念日を意識して始められたと考えられる。一九三八年四月一二日 これらの宣伝に伴って抗日募金が繰り返し集められた。 (盧溝橋事件記念日) には反日集会やデモがおこなわれた。 彼らが大きくなったら国を助けるように、また両親や親戚に今そうするよう勧めなさい 行政長も兼務していた軍事司令官蒋有芬は、一九三八年一一月九日カシュガルの中心モス 反日宣伝であった。 日本製品への輸入関税が引き上げられ、 馬虎山らの反乱前の一九三六年九月にすでに日 一九三八年三月から三九年九月までに 第三回全疆民衆大会が開 ほぼ禁輸に等しい (新疆四一二クーデタ記念 それをうかが 日貨ボイ バ グザー 確 か 政府による 認で 細に れ、 ,状況 では コ 貨 13

持っている人々の存在を推測させる。

そろしく残酷な攻撃を受けている」と述べている。(ヨ) ζ 通 であるイド 知っているように、 0) 憎むべき敵であるとみなすことは我々全員の義務であり、 ガー・モスク向 現在我々は我々の国で戦争をしており、 !かいのバザールの中央でウイグル語の通訳付で演説した。そのなかで彼は このような発言は明らかに、 常にあなたに関係のある無辜の中国人が日本人から それゆえ、 彼らに全く共感などもってはならな 日本を敵と見なさず、 日本を我々共 日本に共感を お

この背景には、 を変えてくれる外部の力に期待を寄せるほかなかった。 民にとっては全く権力への追従に過ぎなかったことをはっきりと物語っている。 たちが日本を賛美し、 乱を警戒してカシュガル旧 たという情報を伝え、 を訴える宣伝が、 ,る。さらにイギリス領事はヤルカンドで日本軍が内モンゴルからウルムチに迫っているという噂が人々を興奮させ(%) また、 さらに興味深い出来事が、一九四一年五月にカシュガルで起こった。突然反日のポスターが全て取り外され、 一時期反日宣伝が途絶えた時期があった。 日ソ不可侵条約の影響があるのかもしれない。 民衆の中の不満分子の希望を膨らませていると考えられたことが原因であるという意見を伝えて 新疆の民衆の多くが現体制の何らかの変化を期待していると観測を述べている(㎝) 演説では「日本は我々の友人である」と語られた。 市の漢人が新市に移動させられた時期であった。 一九三八年一二月の約一 とにかく、 この状況は二週間続き、 この出来事はこのような反日宣伝が地元住 イギリス領事は、 ヵ月反日宣伝が控えられたが、 そして、 住民たちは現在の抑圧体制 日本の新疆侵略 その後なくなった。 これ Ō は反 危 機

三 ソ連勢力の後退と民衆生活の混

合がある。 衆生活 しかし、 の安定が保証されているなら、 南疆においては、 ソ連の影響力の低下とともに民衆生活も混乱状態に陥ることになった。 政 治的に抑圧体制下に置かれてい ても一定の支配 の正統性が調達される場

足を顧みない 玉 取引を行い、 九三八年以降、 人は商取引が 新疆との交易はソ連の政治的動機に基づくものであった。 (3) 元来英国の影響力が強かった南疆地域の交易を完全に牛耳った。 裄 南 -可能になった。 (58) .疆の反乱に関与したという口実によって、 他方でソ連の商 人は新疆に 英国と関係のある者は逮捕や監視 おいてソ連国内より低価格で地元 主に日用品をソ連からの輸入品に頼 中央アジアの主要都市で 0 の対象となり、 商 品 の H の る 崩 品 1 英 不 タ

民衆生活は、

完全にソ連に依存するようになっていった。

なった。警察は売り惜しみをする商店を襲撃し、 商 品 せず抵抗し、 カ ったソ連からの主要な輸入品を中心に基本的な生活必需品の平 人たちはソ連製品の備蓄を始め、 はバザー シュガル地方当局はこの極端なインフレに対して、 かし、 ルから姿を消した。さらに四一年六月末にはカシュ 農産物もバザールでは手に入れられない状態に陥 九三九年九月からソ連からの輸入が減少し、 灯油や砂糖とい 強制的に店を再開させるなどの措置に出たが、 った日用品はますます価格が高騰し、 全ての日用品の価格を固定する命令を出 その結果日 -均価格 ラ た⁶² ガ ルに 崩 独ソ戦開始のニュー が四〇年五月には通 品 の価格が大幅に上昇した。 やがて個人では入手困難に 常の五倍に跳ね スが伝えられた。 したが、 商人たちもそれ 灯油 その結果、 上 P この結果 が 砂 グ た。 た。 糖と 商

境に追い込まれたのである。 維持する余裕を失った。 九三九年九月第二次世界大戦の勃発とともに、 ソ連 への完全な依存状態に置かれてい ソ 連は戦時 所体制に た南疆 移行 0 民衆生活はそれによって四○年代に入ると苦 Ĺ b は や新疆 での影響力を以 前 の ように

事力と警察力によって南疆を押さえてきたが、 ために北上していった。 ても鎮圧することができなかった。 九四〇年にはアルタイでカザ ホータン 地区でも五月に反乱が起こり、 うの反乱が起こった。 マフムード ソ連の余力がなくなり各地で矛盾が噴出し始めると、 の残存部隊と馬虎山部隊の反乱後、 カシ ユ ガ ソ連 ルや 軍と思われる部隊 ヤルカンド - の部隊 盛世才はソ連の力を背景 の増援を受けなが の多くがその反乱 それに対処する らも七 対 処 月

込む力を失い、

有効に機能する行政制度を失っている地方当局は、

ちに依存していく方法をとるしかなくなったのである。

式典では、 ルでは演台に八名ほどの宗教指導者が登り、 九四〇年四月一二日、 民衆集会はほとんど全てカーズィたちによって指揮され、 毎年繰り返される「四一二クーデタ」記念式典では、 軍人たちはカーズィたちに多くの気遣いをしていた。^(g)

ことができなくなったのである。

四結

活 第 維持に失敗し 始とともに抗日におけるソ連の支援をあてにできなくなった盛世才は国民政府との協力関係へと移行したが、 始まり、 フムー 動が開始され、 の忠誠を示しつつ、 期であり、 |世才政権時期は権力確立: ド残存部隊と馬虎山部隊の蜂起を引き起こした。 警察力に依拠した抑圧体制が構築され、盛世才は自身が中国革命の代表的指導者となるためスターリ 国民政府によって離職させられた。 民族平等政策によるネイション形成を追求しつつ、一九三六年以降には抗日を意識した具体的な政治 中央集権化による国家建設が進められた時期であった。これらの政策の矛盾がマフムード逃亡、 抗日を政権の中心テーマとした。 後、 政策的観点から大きく三つの時期に区分できる。 第二期は三七年九月から一九四一年夏までで、大規模粛清に 第三期は一九四一年夏から四四年八月までで、 一九三四 [年から三七年九月までが 独ソ戦 ンの 権 力 0 開 ソ

虎山とマフムード残存軍の反乱であり、

ウイグル改革派との協力の失敗であった。ション形成を挫折させた要因のひとつは、

しかし、

それとともに盛世才の政

ドの逃亡、

それ

盛世才政

権が

初期に企図していたネイ

に念式典では、近年にない光景が現れた。カシュガスとちに多くの気遣いをしていた。ヤルカンドの記念れ、公的な存在は旧市の県長だけであった。押さえウイグル社会の有力者である旧来の宗教指導者たっれ三六年以降には抗日を意識した具体的な政治のた。これらの政策の矛盾がマフムード逃亡、マー九三六年以降には抗日を意識した具体的な政治のた。これらの政策の矛盾がマフムード逃亡、マーカ四一年夏から四四年八月までで、大規模粛清に一九四一年夏から四四年八月までで、独ソ戦の開れ国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがは国民政府との協力関係へと移行したが、権力のがないない。

に 法 魅力を感じてい た抑圧体制であった。 お 目 で追求した。 I標追 ٧V 盛世才にとって新疆が てネイシ |求も新疆 それによって生み出されたのは、 Э た盛世才は抗日と中 におけるネイシ 形成や国家建設のための施策を粘り強く積み上げていくことよりも優先されたのである。 そしてその体制を支えている力はソ連の力であった。 中 3 国 菌 ン の一部であることの意味であった。そして 革命にお 形成と国家建設をともに破綻させた重要な要因であった。 いて重要な役割を果たすために、 ほとんど無力化した行政制度のもと、 ソ連に依拠しながら抗日をおこなうこと さらなる権力強化をスターリ 中国 警察と軍隊だけが権力を の — 部であることが、 ソ連に依存し、 握 的 ま た 手 疆 つ

て抗日戦争は遠くで戦われている戦争に過ぎず、 ネ た新疆は生活面での安定も失われ、 となった。 Ż 抗日の宣 シ 3 ン さらにソ連が戦時体制に移行し、 の一員として自らを位置づけさせるような一 伝が繰り返されたが、 それはウイグル民衆に共感を抱かせるものではなった。 徐々に秩序の崩 新疆に経済的に力を注ぐ余裕を失うにつれて、 しかも自分たちを抑圧する体制が敵対する日本はむしろ期待の対 壊が進んでいった。 切の政治的理念や権利を提示できなかった。 政権はウイグルが 完全にソ連に依存し ウイグ ルに 中 7 玉 象

漢文化 ことを示す根拠は 意識の成長とともに漢族自体を抑圧の主体と認識する見方もなかったわけではないが、 及んでいないことは周 はウイグルのそのような期待を重要な心理的基盤として新疆を再統合できる可能性があったのである。 ウ ´イグル の文化的 の 人々が期待を抱く外部勢力には、 同化 な () 知の事実であり、 の強制は むしろ二〇世紀前半 おこなわれなか 抑圧している主体はあくまでも盛世才の政権とソ連であっ 0 つた。 中国 新疆においては、 の中央政府も含まれる可能性が それゆえもし抑 清末新政時 圧と混乱を取 期の 小規模 あっ り除く力を有するなら、 そ た。 の れが 漢語教育 新 強 疆に中央政 い共通認識 た の強制を除け もちろん 府 であ 中 の -央政府 権 民族 ば 力 が た

- 1 『ネイションとエスニシティ クな要素と市民的要素を定義づけ、民衆に浸透させる過程をさす。アントニー・D・スミス著、巣山靖司・高城和義ほか訳 と義務の平等性、すなわち市民的要素の並存するものと考える。「ネイション形成」とは、ネイションの核となるエスニッ 本稿ではアンソニー・D・スミスの議論に依拠し、ネイションをエスニックな要素と、政治的理念の共有に基づいた権利 歷史社会学的考察』、名古屋大学出版会、一九九九年、一七六頁。
- 2 拙論「一九三○年代新疆盛世才政権下の『ソ連型』民族政策とその政治的矛盾」『史学』第七八巻第四号、二○○九年
- 3 ラティモア著、中国研究所訳 『アジアの焦点』、中国研究所、一九五一年、九六頁。
- 4 新疆社会科学院歴史研究所編『新疆簡史』第三巻、新疆人民出版社、烏魯木斉、一九八七年、二〇六頁
- 5 Allen S. Whiting and General Sheng Shih-ts'ai, Sinkiang: Pawn or Pivot?, Michigan State University Press, Michigan, 1958
- 6 世才統治新疆前期的親蘇親共政策」欒景河主編『中俄関係的歴史與現実』、河南大学出版社、開封、二〇〇四年、三六二~ 三八〇頁。 社会科学版)、一九九八年第二六卷第一期。蔡錦松『盛世才在新疆』、河南人民出版社、鄭州、一九九八年。李嘉谷「試析盛 趙明「怎様評価盛世才」『西域研究』一九九二年第三期。王立業「論反帝会及其與盛世才的関係」『新疆大学学報』
- (7) ここでいう「国家建設」とは、集権的で効率的な行政制度の構築の過程をさす。近代国家は徴税と治安維持を越えた広範 相互補完的に進む場合もあるが、多エスニックな社会においては「国家建設」の進展が「ネイション形成」を阻害する場合 囲な生活領域への行政の介入を伴うため、そのような制度化は不可欠である。「ネイション形成」と「国家建設 も少なからず起こる。
- 8 渓出版社、台北、一九八○年、三七二三頁。 安甯『新疆内幕』、創墾出版社、シンガポール、一九五二年、一○八、一○九頁。張大軍『新疆風暴七十年』 第七冊、 蘭
- (9) 前掲、『新疆簡史』、二九二頁。
- 10 したという。この対日政策が盛世才政権の主要な不満であったことを示している。前掲、『新疆内幕』、八一、八二頁 鄧文儀は歓迎会での演説で、中央の対日政策について、なぜすぐに対日戦争を発動しないのかに関する苦衷と理由を説明
- 11 一九三四年盛世才は駐ウルムチ総領事アプレソフを通じてソ連に手紙を送り、そこで「蒋介石指導の中央政府を転覆する

- ことが中国を救い、新疆を救う唯一の道である」と述べている。これは盛世才が国民政府に帰順した後、ソ連によって国民 **咏府に暴露され、盛世才もその事実については認めている。中国国民党中央委員会党史委員会編印『中華民国重要史料初編** 第三編、戦時外交(参)』、台北、一九八一年、四三七頁。
- 12 上で、この粛清を「ソ連勢力の存在による新疆省の二重権力構造に対する盛世才の反発」として見る。また民族政策の実質 ら見ても鋭い。王柯は盛世才のソ連への接近が単に「ソ連の力を利用してその支配を確立・維持すること」であったとした のイスラムと民族問題』、東京大学出版会、一九九五年、七六~八〇頁。 ったとしている。Allen S. Whiting and General Sheng Shih-ts'ai, op.cit., pp. 52-53. 王柯『東トルキスタン共和国研究 的破綻をも含めて、「二重権力構造におけるソ連勢力と民族指導者との連帯に対する盛世才の反感」がその重要な動機であ にかは分からないとした上で、これをスターリニズムの新疆への拡大と見ることができると述べている。この指摘は現在か 他の先行研究を見ると、ホワィティングは、盛世才自身のいう「国際的陰謀」の根拠は乏しく、盛世才の疑念の根拠がな
- 13 張式琬「我父親張馨的一生」、中国人民政治協商会議烏魯木斉市委員会文史資料研究委員会編 新疆青年出版社、烏魯木斉、一九八二年、六三~八二頁。 『烏魯木斉文史資料 第
- 14 七輯、新疆人民出版社、烏魯木斉、一九八一年、一一八頁。 西聯華「監獄生活回顧」、中国人民政治協商会議新疆維吾爾自治区委員会文史資料研究委員会編 『新疆文史資料選輯

第

- <u>15</u> India Office Library and Records (IOR): Political & Secret Files, Collection 12, Turkestan, British Library, London, 2387,
- 16 中国人民政治協商会議新疆維吾爾自治区委員会文史資料研究委員会、新疆維吾爾自治区档案館編 新疆文史資料第二三輯』、新疆人民出版社、烏魯木斉、一九九一年、七八、七九頁 『東北抗日義勇軍在新疆
- 17 Union and the Chinese Province of Xinjiang in the Mid-1930s", Far Eastern Affairs, Vol. 35, Number4, October-December ソ連指導部から盛世才とアプレソフに宛てた手紙の全文は、Raisa MIROVITSKAYA and Andrei LEDOVSKY, "The Soviet
- 18 Allen S. Whiting and General Sheng Shih-ts'ai, op.cit., p. 207. 盛世才「牧邊瑣憶」『五十年政海風雲 天山南北』、 春秋
- 19 新疆省権力を握った盛世才は、自らの統治を助ける人材を求めて、 日本留学時代の同郷の友人であった何語竹、 郎

一九六七年、五三頁。

六一頁、以上ともに前掲、

『東北抗日義勇軍在新疆―

- 道衡らを新疆に招いた。彼らは「十大博士」と称された。
- $\widehat{20}$ Chinese Law and Government, vol. 30, no. 1, January-February 1997, pp. 57-66
- 21 『張学良與中共関係之謎』、江蘇人民出版社、 南京、二○○六年、一三八~一四一頁
- ルバース軍を撃破した。これは盛世才政権下で新疆が安定を回復してから初めてのウイグル有力者に対する武力行使であっ スが受け入れに抵抗したため、盛世才は新疆で最も先進的装備を備えた教導第四大隊を派遣し、さらに増援軍を投入してヨ 西路軍の残存兵を受け入れる際、コムルで名目上省政府に服しながらも独自の軍事力をもつ自律的存在であったヨルバ 従来の方針を変えてでも実現させたところに、盛世才が中国共産党に対する援助者となることを重視していたことがみ

てとれる。李国卿「一九三三至一九四二年在新疆的点滴回憶」、五七頁、尹玉衡「迎接西進長征紅軍来新疆回憶片断」、六〇

-新疆文史資料第二三輯』。

- きである。 られる申し出ではないはずである。やはり一九三七年一一月に王明に申し出たのが最初の正式な入党の申し出だと考えるべ にも入党を求めたとされるが、これは当時西路軍とともに新疆に入った黄火青の一九八三年の座談会での発言に基づくもの るだけで、初めて連絡をとる相手への挨拶程度にしか入党に関しては触れられていない。また西路軍を受け入れた際、 の王明への手紙では、若い頃入党しようとしたが周囲の事情のためかなわず、いまもその希望は持ち続けていると伝えて 蔡錦松は盛世才が一九三六年、三七年に何度も中国共産党への加入を求めたとしている。しかし、一九三六年三月十五 信憑性は高くない。 盛世才はあくまでも対等以上の状況で初めて申し出たと考えられる。 簡単に陳雲が拒絶したと述べているが、もし本当に入党を求めていたなら、それほど簡単にすませ 前掲、蔡錦松『盛世才在新疆』、二四四
- でウルムチに立ち寄り、延安で入党の申し出が政治局員全員から歓迎されたことと、コミンテルンとスターリンに報告した Allen S. Whiting and General Sheng Shih-ts'ai, op.cit., pp. 186–188. 一九三八年三月一六日任弼時がモスクワへ向かう途上 入党手続きをおこなうことを盛に伝えた。中共中央文献研究室『任弼時年譜(一九○四─一九五○)』、中央文献出版社 二〇〇四年、
- Sheng Shih-ts'ai, op.cit., pp. 204-207. 盛のモスクワ訪問の事実は、 Law and Government, vol. 30, no. 1, January–February 1997, p. 70. 彼はそこで中国共産党ではなく、全連邦共産党(後のソ連共産党)への入党を認められた。Allen S. Whiting and General また李嘉谷はソ連の外交史料によって、会談の存在を確 鄧発のディミトロフへの手紙でも確認できる。

- 前掲、 李嘉谷「試析盛世才統治新疆前期的親蘇親共政策」、三七二~三七三頁。
- (26) Chinese Law and Government, vol. 30, no. 1, January-February 1997, pp. 75-78
- (27) ibid., pp. 16–1
- 清廉、建設」を内容とする 「六大政策」とは新疆の基本政策として一九三五年以来掲げられているもので、「反帝国主義、 親ソ連、 平和、
- 29 **彙編』、新疆青少年出版社、烏魯木斉、一九八六年、一九二、一九三頁。** ·反帝戦線』に掲載されている。共青団新疆維吾爾自治区委員会、八路軍駐新疆弁事処記念館編『新疆民衆反帝聯合会資料 盛世才は一九三九年七月新疆学院卒業式で初めてこのような内容の演説をおこなったと、実際にそれを聞いた趙明は述 前掲、趙明「怎様評価盛世才」、三七頁。また二ヵ月後、李一欧が軍事学校卒業式で同様の演説をし、 全文が雑誌
- 30 周国全、 郭徳宏『王明伝』、安徽人民出版社、合肥、一九九八年、一五二、一五三頁
- 派遣された。中共党史人物研究会編『中共党史人物傳』第二五巻、陝西人民出版社、西安、一九八五年、八~二〇頁。 中国共産党組織設立に関わった古参党員であった。ソ連留学後コミンテルンで活動し、一九三五年コミンテルンから新疆に Chinese Law and Government, vol. 30, no. 2, March-April 1997, pp. 12-14. 王寿成の本名は兪秀松で、一九二○年上海
- (32) 同上、一七~一九頁。
- 33 華譜編訳「《季米特洛夫日記》中有関中国革命重大事件的記述」『中共党史研究』、二〇〇一年第五期、七六頁
- (¾) IOR, 2383, 1941. 2. 6
- 都大学人文科学研究所研究報告、一九八八年、一三七~一四〇頁。 四二頁。伊原吉之助「盛世才の新疆支配と毛沢民の死― 前掲、蔡錦松『盛世才在新疆』、一~二四頁。前掲、王柯『東トルキスタン共和国研究 -抗日戦争期中ソ関係の一齣 中国のイスラムと民族問題』、四〇~ ――」、竹内実編『転形期の中国』、 京
- 36 強硬な外交政策を採らなければならない、五. 界同胞は全ての漢奸と断固として闘争しなければならない、四.帝国主義に対し不抵抗政策を放棄し、もっとも断固とした で国の経済と農工商業を発展させなければならない、七. 七項目救国綱領の内容は以下の通りである。一.全国各族各界同胞が心をひとつにして誠実に団結し、中国を救わなけれ 内戦を停止し、断固とした闘争によって中国への侵略と瓜分に反対しなければならない、三: 外からの経済侵略と密輸とに断固として闘争しなければならない、六: 孫中山先生の遺嘱に従って、 世界の我々を平等に遇する民族とと 全国各族各

- 。に奮闘し、中国の存亡の危機を救わなければならない。前掲、『新疆民衆反帝聯合会資料彙編』、四七○頁。
- 37 前掲、 『中華民国重要史料初編― -対日抗戦時期 第三編、戦時外交(参)』、四三七頁。
- (38) 前掲、楊奎松『張学良與中共関係之謎』、一四○、一四一頁。
- 39 張友坤主編『張学良年譜』、社会科学文献出版社、 一九九六年、一○二一、一○四四、一○四五頁。
- $\widehat{40}$ 四三七頁。 前掲、 蔡錦松『盛世才在新疆』、二五三頁。前掲、 『中華民国重要史料初編 対日抗戦時期 第三編、 戦時外交
- 41 以下の盛世才の言葉はカシュガルのカーズィ長がモスクで金曜の祈りの後に民衆に伝えた内容である。IOR2383, 1938
- (4) IOR2357, 1938. 1. 10, 1938. 1. 17.
- $\widehat{43}$ Who's Who in Sinkiang, Corrected up to 26th July 1938, p. 12. IOR2357, 1938. 3. 28 ともにコミンテルンから新疆に派遣されてきた。一九三八年初めには彼も盛世才の粛清対象となり逮捕された。IOR2392 アブドゥル・カーディル・ハジはカシュガル区出身者でタシュケントに渡り革命運動に従事したことがあり、王寿成らと
- (4) 前掲、安甯『新疆内幕』、一〇三頁。
- (45) IOR2383, 1938. 7. 14.
- (4) IOR2357, 1938. 2. 14, 1938. 4. 25.
- (4) IOR2357, 1938. 3. 21. IOR2358, 1938. 9. 29.
- 48 5. 16. 日本製品は英国籍商人によって新疆に輸入されていた。IOR2332, 1936. 10. 1. IOR2364, 1936. 9. 24, IOR2357, 1938
- (\pma) IOR2364, 1935. 9. 19
- (云) IOR2383, 1938. 4. 14, 1938. 7. 14. IOR2332, 1938. 8. 3.
- (5) IOR2332, 1938. 12. 5
- (\(\Sigma\)) IOR2383, 1938. 11. 3
- 抗日募捐档案史料』、新疆人民出版社、烏魯木斉、二〇〇八年、三二~一〇〇頁。 新疆維吾爾自治区档案局、中国社会科学院辺疆史地研究中心、《新疆通史》編撰委員会編 『抗日戦争時期新疆各民族民衆

- 54 IOR2383, 1938. 11. 10.
- 55 IOR2332, 1939. 1. 5.
- 56 IOR2383, 1939. 2. 2.
- 57 IOR2383, 1941. 5. 29. IOR2383, 1941. 6. 26
- 58 イギリス領事館の報告の話題はほとんどがこの点に関わるものである。例えば、IOR2383, 1938. 9. 1.

IOR2358, 1938. 12. 27. Allen S. Whiting and General Sheng Shih-ts'ai, op.cit., p. 65

60 IOR2383, 1940. 5. 9.

59

- 61 IOR2383, 1941. 7. 3, 1941. 8.
- $\widehat{62}$ IOR2383, 1942. 3. 12, 1942. 3. 26

63

IOR2383, 1940. 5. 9

- 64 党史弁公室編『抗日戦争時期中共党人在和田』、新疆人民出版社、鳥魯木斉、一九九五年 こっていたと思われる一九四〇年前半に関する記述はほとんどない。反乱の主体、状況など全く不明である。中共和田地 ている。IOR2383, 1940. 5. 16, 2383, 1940. 5. 30, 1940. 7. 11. 中共和田地委党史弁公室編 抗日戦争開始三周年記念の大衆集会で、演説者がホータン地区での反乱と、政府軍の苦戦を認め、速やかな鎮圧を約束し ホータンで行政に携わっていた中国共産党員の回想や、県当局の報告、命令など様々な史料を載せているが、 『抗日戦争時期中共党人在和田 反乱が起
- 65 IOR2383, 1940. 4. 18.

66

IOR2383, 1940. 5. 2.

67 pp. 72-75. Jon Rudelson. Oasis Identities: Uyghur Nationalism Along China's Silk Road, Colunbia University Press, New York, 1997 トラーに対する賛美が存在していると指摘している。この背後にも三〇、四〇年代の歴史的経験があると思われる。Justin 一九八九年、 九○年に新疆でフィールドワークをおこなったルデルソンは、 新疆には広くナチス・ドイツやアドルフ・ヒ

恵二(きのした けいじ)

慶應義塾大学商学部非常勤講師 杏林大学外国語学部非常勤講師

中国近現代政治史

専攻領域 所属学会 最終学歴

主要著作

アジア政経学会、日本国際政治学会

慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得満期退学 群馬県立女子大学国際コミニュケーション学部非常勤講師 横浜市立大学国際総合科学部非常勤講師

- 一九三○年代新疆盛世才政権下の『ソ連型』 民族政策とその政治的矛

盾」『史学』第七十八巻第四号(二〇〇九年) 楊増新の新疆統治 伝統的統治と国家主権

『法学政治学論究』

『法学政治学論

第四八号 (二〇〇一年) 中国国民政府の新疆統治 —一九四二~四七年

究』第三八号(一九九八年

24